

民衆と大分県の西南戦争

三重野 勝人

はじめに

平成十七年一月二十九日、熊本歴史学研究会主催、「熊本歴史学研究会創立一〇周年記念シンポジウム」が熊本市国際交流会館ホールで開催された。テーマは「西南戦争と人びと」で、西南戦争を単に西郷軍と官軍との軍事的対決の観点からのみとらえるのではなく、西南戦争下の民衆の実態を明らかにして、西南戦争を民衆の視点から見直して見ようと意図したものであった。

画期的なことは、このシンポジウムが、戦争に関係した鹿児島・熊本・宮崎・大分四県からのパネラー参加の下に開催されたことで、本県の西南戦争を考える上でも示唆される点が多々あったと実感している。県下からは、近現代史研究会主宰永野氏の委嘱により不肖筆者が参加の機会を与えられたので、その主旨を踏まえ以下に「民衆と大分県の西南戦争」と題し論稿を提示したい。

第一節 「シンポジウム熊本・宮崎県のレポート」の要点

一 熊本県レポートの要点

熊本攻防戦と城下町焼失の真相

始めに熊本城攻防戦の状況を簡単に述べておこう。

西郷軍が熊本城総攻撃を開始したのは二月二十二日のことであった。西郷軍の熊本鎮台攻撃に先立つ二月十九日、熊本城天守閣で火災が発生し、城下に飛び火して多くの民家が焼失した。これについては『シンポジウム資料』の「西南戦争略年表」に次のような一文がある。

二・一九 熊本城炎上。熊本県庁、古城、より御船町に移る

熊本の上大迫松芳氏（熊本三州会相談役）はこれを受けて、そのレポート「西南戦争の鎮撫隊について」と題する論稿の中で、当時少年であった石光真清の手記「城下の人」の次の一文を引用して、これが鎮台兵の計画的な放火であると断定している。

大火は二十日の夜になって漸く鎮まったが、城下の殆ど全部が見渡す限り焦土と化して惨憺たる光景であった。この大火は薩摩軍の侵入に備えて鎮台が火を放ったものであるが、当時の一般の人々には考え及ばないことであった。薩摩軍の隠密が侵入して放火したとか、或いは熊本土族の一部が呼応して火を放ったとか色々の流言が飛んでいた。

この手記には、これに先だって鎮台兵が町の人々を強制的に避難させて、各戸に火を放って回ったと記されている。

薩摩軍二重峠進出と阿蘇谷の農民一揆

熊本鎮台攻防戦の渦中、西郷軍の一派は二十四日大津町に進出、二十六日には阿蘇谷を見下ろす二重の峠に布陣した。直後

の二十八日、前日より不規則の動きをしていた阿蘇谷の農民が、内牧で打ちこわしを始め、翌三月一日にはその故は喜地、坂梨、坊中など阿蘇谷一帯に広がった。一揆は一時西郷軍に大きな期待を抱きこれに協力したが、結局は十分な連携もできないまま三月十日には、豊後口警視隊によって鎮圧された。後述する大分県宇佐・速見等四郡一揆と同様、西郷軍と一揆衆の提携はならなかったようである。

なお豊後口警視隊とは、西南戦争勃発に危機感を抱いた大分県当局が、政府に救援を要請して派遣されたもので、中津經由三月一日大分町に到着し直ちに坂梨に出動し一揆の鎮圧にあたったものである。

民衆史より見た熊本県西南戦争の特徴

熊本県における西南戦争の特徴を民衆との関わりから見れば、県民被害の主たる要因は、県内各地の戦場で西郷軍・官軍両者の激戦が連日のように展開されたことにある。加えて熊本城下町の鎮台による放火が被害を一層大きくした。前記『シンポジウム資料』によれば、家屋を失った県民に対する賑恤地金受領戸数は次のとおりである。

「家屋焼燼賑恤金」支給戸数一万二九五七戸

「家屋破毀賑恤金」支給戸数一九六六戸

鎮台の焼き打ちと合わせ家屋被害が非常に深刻であったことをうかがうことができる。これに対し西郷軍による武器弾薬・食料・金品の徴発ないしは略奪行為は、ほとんど見られなかったのではないかと推察される。その背景には、熊本城攻防戦以後、西郷軍、官軍間の激戦が白兵戦を含め間断なく続いたこと、戦闘が緒戦であり、戦場が鹿児島県に隣接した至近距離にあった関係から、薩摩軍の準備携行した武器弾薬・食料その他軍需物資がまだ枯渇状況になかったことなどが上げられる。この点が豊後の場合と異なる点であろう。

二 宮崎県レポートの要点

廃藩置県後の宮崎県の推移

明治四年（一八七二）の廃藩置県後の六年に宮崎県が成立した。その後九年には鹿児島県に編入され、一〇年の西南戦争当時、宮崎県域は鹿児島県に属していた。したがって西南戦争にかかわっては、基本的には行政を通して西郷軍に協力すべき立場にあった。ことに県令大山綱吉が鹿児島市学校党と一体となった行政を施行していた状況下ではなおさらのことである。なお同県が再度独立設置されるのは明治一六年のことである。

西南戦争における鹿児島県宮崎支庁の動き

宮崎県の藤井美智雄氏（宮崎県地方史研究会員）は、レポート「西南戦争と日向国の人々」の中で、宮崎支庁の姿勢を戦況の推移と関連づけて次のように四段階に分けて整理している。*印は筆者註

(1) 明治一〇年二月初〜三月は支庁吏員が西郷挙兵に参画を呼びかける。

* 二月二日〜四月一四日 熊本鎮台攻防戦

(2) 三月末〜五月中旬は政府命令に服従。

* 四月二日 西郷軍熊本鎮台攻撃失敗人吉へ↓六月一日 官軍人吉占領

(3) 五月末〜七月末は軍の軍務所になる。

* 五月三〇日 西郷隆盛宮崎へ撤退↓七月三十一日 官軍宮崎・佐土原占領

(4) 八月以降は「賊徒の暴命に応じないよう諭達」したり管内の整備に着手した。

* 八月二日 官軍高鍋占領↓八月一五日 官軍延岡奪還

これを見ると、官軍の攻撃による戦況の変化を受けて県の対応も二転三転するが、初期の西郷軍への協力呼びかけが、県下

士族・一般民衆の煽起に大きく影響したように考えられる。その証となるのは、党薩諸隊への参加者が「日向国出動合計七〇一三人（内農兵三四八〇人）」・「戦死者九六九人」という現実である。

このうち農兵については、「宮崎ノ守備兵ハ凡ソ千人位ハアルヘシ、内三百人ハ士族ニテ余ハ新募ノ農兵ト云フナリ」とあるように、地域によっては士族を上回る動員数を数えている。これには「平民ハソノ強壯ナル者ヲ選ヒ、若シ相拒ム者ハ敵ト見做シ、軍法ニ処スルトノ嚴命ヲ下シ、凡六百余人ヲ募リ海岸等の防禦為致置」のように強制が伴ったことも力となっているが、全体としては西郷軍に同情的な雰囲気があったと見るのが無理のないところであらう。

このことは「人民ヨリ賊徒へ用立金穀」集計が、日向国（鹿児島県九四〜一〇九大区）分だけで「金五万七五八八円余・米一六三七石・鉄砲三〇九挺・銅・白木綿・布団など」に達していることを見ても容易に推察される。但し、西郷軍による金品の強奪も散見され、宮崎郵便局など二カ所で為替金一万二〇二円余が、また西郷軍解散後の八月二八日に諸県郡飯野郷救恤所に西郷軍が襲来して、金二六二六円が奪取されている。（以上藤井氏レポートによる）

民衆史より見た宮崎県域の西南戦争の特徴

宮崎県域の場合は、西郷軍本隊の敗走に伴い、六月初〜八月末にかけて全域が戦場化した。しかし域内全域が鹿児島県に属した関係もあって、西郷軍に対して組織的に兵員や金品の提供がなされた以外は、民衆の戦争被害は戦線の移動拡大に伴う家屋焼失・田畑の荒廃・牛馬の徴発などを主としている。西郷軍が、軍資金の補填目的に軍票（通称西郷札）を造幣し使用したことが、これを裏付けている。六月一九日〜七月末まで佐土原で製造され、その額は一四万円に達し一〇万円が使用されたという。「西郷の大払い」と揶揄されているように、これに対する正貨との交換の保証がなかったことは言うまでもない。軍票は官軍に没収され焼却された。

第二節 民衆と大分県の西南戦争

一 中津隊と民衆

宇佐下毛等四郡一揆と中津隊

「西南戦争と人々」の視点で、熊本・宮崎両県から報告された西南戦争の実態は、要旨前記のような特徴を伴うものであった。次に大分県の実態について述べてみたい。大分県の西南戦争は三月三十一日、増田宋太郎ら中津隊が大分県中津支庁などを襲撃したことに始まる。

中津隊が陽動作戦として大分県庁を攻撃した四月二日、宇佐郡で地租改正に反対する農民一揆が起こり、たちまち下毛・国東・速見の三郡に波及した。この一揆と中津隊の関係はどうであったのか。

『大分県警察史』によれば、中津隊決起後、松本大五郎らの一隊が豊後高田警察署を襲撃し調査を勧誘、増田本隊の後を追わせ、大五郎らが妙寿寺を拠点にして一揆勢への働きかけを試みたと記している。県当局から内務省宛ての上申には、この間の経緯が次のように記されている。

三日夜松本為平（大五郎）（中略）高田村ニテ暴行ス、区长南喜平、村民ヲ嚇シテ之ヲ縛セントス、拒捕ノ際終ニ村民ノ乱殺トナル、此時中津賊ノ残徒数名ヲ縛シ得タリ、此松本為平ハ中津賊徒ノ党與ニシテ本月一日午後二時頃（中略）該村ニ乱入シ、造言以テ人民ヲ眩惑シ、軍用ニ託シ富戸ノ金円ヲ略奪スル殆ド一千円横行暴戻極マリナシト、其罪死猶余リアリト謂フベシ。党民モ彼等ノ扇動ニ係ルヤ未ダ知ルベカラズト雖モ徹頭徹尾一件ノ強願モ無之、要スルニ一個ノ乱民タルニ過キザルベシ。

（四月六日内務省へ上申・『大分県警察史』）

賊スル所のかす 暴戻ニ乱暴 党民ニ徒党を組んだ農民 強願ニ強訴

この内申から見ると、松本らは一揆農民の要求を汲み上げ戦列を共にして戦ったような形跡はなかったことになる。「強願モ無之」とは、彼らが農民と共に強訴するようなことは全くなかったとの意である。であれば、後述する増田本隊と同様、農民に食料・軍資金を強要しただけの結果となり、区長の唆しがあったにしろ農民に敵意を抱かれて「乱殺」（刃自との説もある）されたとも考えられる。

大分県庁襲撃と放火

四月日の県庁襲撃に際し、中津隊は刑務所を襲い、町並に放火して別府へと退いた。このような戦闘最中の放火は、西南戦争中各地で見られたことであるが、放火は西郷・官両軍の戦略・戦術と密接にからんでいるので、西郷軍説、戦闘中説などと予断を以て見るのは避けなければならない。大分城下の放火は中津隊によるものとされている。このときの放火では、香川邸（知事）をはじめ勢家、沖の浜、船頭町にかけて四、五百軒が焼失したという。刑務所にも放火したが、囚人は事前に避難して逃亡者もなかったという。

決起した中津隊が、中津で官金を奪い富豪を襲ったのは、食料弾薬など十分な備えもなく行動を起こしたことの帰結であり、これは後に中津隊が所属した豊後侵攻西郷軍奇兵隊のありようと全く共通したものであった。

二重ノ峠途上の中津隊と肥後・豊後の村々

阿蘇方面で農民一揆を鎮圧し、さらに西郷軍と対峙中の警視隊は、県当局の救援要請を受けて大分に転進し、三日大分から別府へと中津隊を追撃、さらに宇佐等四郡一揆鎮圧にもあたった。

警視隊撤退の間隙をついた中津隊は四日、二重峠で薩摩軍と連絡することに成功したが、途上「小挾間村（庄内町）デ馬数頭強奪シ、速見郡川上村ノ内字嶽本（湯布院町）ニ出、馬三十頭斗、人夫多人数ヲ強募」（『明治十年騒擾一件』青潮社）、更に飯田高原で副戸長時松正平を脅し、人夫や駕籠、戸板などを用意させ、隊士の運送を強制、四日に阿蘇郡北里村（阿蘇郡小国町）に入り、ここでも金品・銃などを強奪した。

中津隊・増田宋太郎などについては、参戦の動機など決起の側面からのみ論じられることが殆どであるが、被害者となる民衆の側から見れば、決起に共感する者は別として、その行為は強盗、無頼の輩のそれと変わるところがなかったのである。

四月二十一日付け戸長北里唯義より熊本県への届けによれば、途上の中津隊の様子は次のようであった。

賊の人数百人ばかり、洋服や袴股引を着用、人夫一八〇人ほど、目駕や俵など種々の乗り物に乗り徒歩もあり、全員が小銃を持ち、槍二本、長刀もあり、「新政党」と記した白の大旗をかかげ、白い鉢巻きを締めていた。さらに玉葉（火薬）を入れた俵や提灯の入った長箱を持っていた。人夫は飯田高原で徴発された人夫で二重峠まで運送を負担。

〔『玖珠町誌』・『九重町誌』より〕

一行は小国の玉子湯で一泊し、小国街道を阿蘇大観峰へと向かい、五日、阿蘇外輪の豊後街道二重峠（大津町）で西郷軍に出会った。ついで大津の野村忍助のもとに行き、六日熊本で西郷隆盛らと会見、以後『中津隊』として野村の指揮下に入り、豊後に侵攻した奇兵隊三〇〇〇と行を共にする。

第二節 西郷軍の豊後侵攻と民衆

一 城下町 竹田・臼杵・佐伯の西郷軍

奇兵隊豊後進攻の特性

熊本城攻防戦に敗退した西郷軍は、人吉への後退途上、痛手を被った軍を九隊に再編した。その精銳部隊である野村忍助率いる奇兵隊三〇〇〇は延岡に転進し、ここを豊後侵攻の拠点とした。豊後侵攻の目的は、官軍が熊本・人吉方面の激戦に力点を置いていた間隙をついて豊後方面を攪乱し、さらには緒戦において果たせなかった小倉・門司・関門方面への活路を切り開

き、「政府問責上京」(大分県地方史)第一九〇号参照)を果たすことにあった。

西郷軍の弱点は、武器弾薬・食料その他戦争遂行に不可欠な軍需品の供給に全く見通しを持たず、それらを侵攻先の現地調達に頼らざるを得なかったことである。開戦時西郷軍の勢力範囲であった日向はまだしも、そのような利点の一切ない豊後においては一層現地への依存度を高めざるを得なかった。まして熊本城攻防戦で多大の損害を被った後においてはなおさらのことである。豊後侵攻は、このような悪条件の下に推進され、しかも「政府問責上京」の宿願を実現すべき最後に残された起死回生の作戦であったが故に、豊後町村民衆の被害も、肥後・日向とは比較にならない程に増大せざるを得なかったのである。西郷軍の竹田侵攻戦略と民衆

豊後戦の火ぶたは五月十二日、西郷軍奇兵隊が佐伯署重岡分署を攻撃することによって切られた。西郷軍は十三日には竹田に侵攻、十四日には後統部隊も到着しその数は一八〇〇名に達した。竹田占領は、官軍の猛攻にもかかわらず、五月十三日から二十九日の一七日間に及び、自然の要害が幸いしたとはいえ西郷軍の竹田侵攻に賭けた意図の並々ならぬものを感じさせる。『竹田市史』によれば、侵攻した西郷軍は先ず竹田警察署、裁判所、一小区用務所を襲撃して行政・治安機関を占拠した。

また要地に歩哨を立て、主要な橋畔に喚問所を設け不審者を尋問留置し町民の出入りを規制した。西郷軍の緊急の課題である食料・武器弾薬・軍資金の確保のためには、登高社(土族救済・授産施設)を襲い九〇〇〇円を略取、十九日には久住・三重方面に出動して米二〇〇石以上を奪取、途上の村々から馬五〇余頭を徴発して竹田に急送し、商家の倉庫に収納した。

武器弾薬の確保のためには、民家に銃器弾丸の供出を命令、木浦鉾山・尾平鉾山からは鉛を集め、弾薬の製造所を竹田学校・七里蔵、寺町の豊音寺に急設した。このような西郷軍の動きから見ると、その狙いは、竹田を豊後経略の根拠地と位置付け所期の目的達成に資しようとしたものと推察される。十六日その一隊が大分県庁襲撃に向かった(失敗)のもこのことを裏付けている。

五月二十二日から官軍の反撃が本格的に始まると各地で激戦が展開された。このため竹田城下各町村は両軍の銃砲撃で破壊

され、政府軍の砲撃や西郷軍の放火で火災も発生し、被災家は竹田町九一七戸、会々二八五戸など全体では一五〇〇余戸に達したと伝えられている。

なお、このような実害以外に、党薩諸隊の「竹田報国隊」結成に拘わる士族に対する強要も、その家族を死の恐怖にさらす結果をもたらしたようで、当時の伝聞では、一〇歳に満たない少女に、母親が死に際しては膝をしっかりと紐で縛り、取り乱すことがないようにと諭す場面もあったという。

三重・臼杵の戦闘と戦禍

竹田攻防戦に敗れた西郷軍は、小野市に撤退後戦列を立て直し三重市に侵攻、五月三十一日には反撃に出た官軍を撃破して臼杵へ向かう。

西郷軍の重岡侵攻以来の三重市の状況については、五月十二日に西郷軍の通牒があり、翌十三日に「其地通行致スニ付人馬ノ用意ヲ為スコシ」(『征西戦記稿』三十六卷)との触れがあったという。数日を経て用務所に西郷軍が入り込み軍用金の徴発を画策したが役人が逃亡して果たせず、代わりに各戸主が呼び出され、刀剣により脅迫されて三〇〇〇円余を強奪されたという。(佐藤盛雄「西南の役における豊後方面の戦闘」Ⅱ仙田昇『大野郡知名人奮闘史』所収・『三重町誌』より)

六月一日から十日にわたる臼杵攻防戦では、西郷軍が「士族ノ財貨ヲ略奪シ」、「留恵社諸物品ヲ糶てんばい売ばいスル等ノ暴挙」をなした(『太政類典』)ので、一般民衆に被害が及んだことが想定されるが定かではない。今後の調査が待たれる。西郷軍が官軍の反撃に退去す際、町内各所に放火したので、家屋三三四戸が焼失した。(『臼杵市史』)

佐伯の西郷軍

県南における西郷軍の侵攻地域は、現弥生町・佐伯市・宇目町・直川村・蒲江町及びそれに接する大分・宮崎の県境山岳地帯に及んだ。

佐伯市への西郷軍の侵攻は、五月下旬から六月上旬(二十五、二十七、三十一日、二、六日、十二)に散発的に行われたが、

六月一日に西郷軍の撤退先の人吉が政府軍に占領され、それに先立ち西郷本隊が宮崎に移動したこともあって、西郷軍の危機感もかなり深刻であったと考えられる。一回目の侵攻は三〇〇名、二回目は四〇〇名、三回目も同規模と考えられるが、侵攻にあたっては警察署・裁判所・学校などに侵入して建物を破壊、各要所や海岸線の取締を嚴重にし、警官・区戸長・土族の行方を嚴重に探索した。三回目の侵攻に際しては、残留土族や富商などを養賢寺に集め西郷軍への参加、軍資金の提供を勧誘した。新奇隊の結成はこの呼びかけによる。

西郷軍侵攻の間には、その命令に背き、また行動を罵ったなどの理由で罰せられた町民もあった。『佐伯市史』によれば「土器屋の坂本元蔵は薩軍の行動を罵ったかどで捕らえられ、殴る蹴る踏むの暴行を加えられた上、処刑されようとした」が長男惣五郎の懸命の助命嘆願が西郷軍の心を揺さぶり釈放された。また古市村龍護寺戸長川野良平は一本松屯所の西郷軍から人夫徴発を命じられたが応じる者がなく、その旨を屯所に届けたところ「戸長たるものが約束を覆すとは不都合千万」と大喝一声抜き打ちに一刀を右肩に浴びせられたという。

事例は異なるが堅田村大越の清原宇太郎は、黒沢口の政府軍に見込まれ敵状視察の最中に捕らえられ、激しい拷問を受けたが口を割らなかつた。六月十二日西郷軍が佐伯を引揚げ退却する際西桁形に引き立てられ、衆人監視の中で斬首、遺体は街道横に磔にされ腹部を断ち割られたという。窮地に追い込まれつつあった西郷軍の焦燥を示す出来事であった。

二 豊後日向国境の激戦と村々

県境山岳地帯の戦跡と「西南戦争之記録」(調査記録)の発刊

豊後西南戦争の中末期にあたる六月下旬から八月中旬にわたる戦闘は、豊後水道沿岸から祖母傾山系へと連なる約四〇キロの山岳地帯を主戦場として戦われた。戦場は大ざっぱには東部・中部・西部に分けて考えられる。東部戦線は蒲江町と日向東臼杵郡北浦町にまたがる地域、主要戦跡としては津島畑山が最も有名である。中部戦線は佐伯市石神峠・直川村と東臼杵郡北

川町にまたがる山岳地帯、西郷軍、官軍の争奪戦の展開された陸地峠などが存在する。西部戦線は宇目町から同北川町にわたる地域で、豊日境界の梓峠、宇目町域に属する黒土峠・城の越・赤松峠など、奇兵隊の豊後進攻の突破口ともなった激戦地帯からなる。(「大分県地方史」第一九〇号地図参照)

現在、激戦地となったこれら地域、殊に山岳地帯の台場跡などの戦跡調査が実施されつつあるが、その経緯については、西南戦争を記録する会の「西南戦争之記録」第一号(二〇〇二年九月刊・代表高橋信武氏)に詳しい。

蒲江葛原浦・丸市尾浦の西郷軍

六月初旬に臼杵戦に敗退した西郷軍は、弥生・直川方面を経て重岡へと敗走した。これを追うように官軍は、三重から小野市へと進み重岡をも奪回した。これに対し六月下旬延岡から北上した西郷援軍が反撃を開始し、七月上旬にかけて豊後・日向国境線全域を回復しここに強固な防御線を構築して豊後征覇の拠点にしようとした。

蒲江葛原浦・丸市尾浦方面に西郷軍が侵攻したのはこのような状況の中であった。丸市尾浦・葛原浦に西郷軍が初めて侵攻したのは、六月二十六日である。資料は次のように伝えている。

△丸市尾浦▽

旧五月十五日(陽曆六月二十六日)より十九日まで薩摩隊長兵百二十余人を率い此地に滞在、但し日向国三河内村より來り同地にさる。

△葛原浦▽

旧五月十五日正午時、賊軍凡そ五十余人日向国三河内村より当葛原へ進入、言語頗る温厚、聊かも暴力を加えず、直ちに三河内村にさる。

西郷軍が国境一帯で反撃を始めたのは六月二十四日、両浦に侵攻したのが二十六日であるから、これは西郷軍の反撃の一環としての侵攻であったことになる。目的は、国境線石神峠から東、丸市尾、葛原浦と接する明石峠・焼尾峠・津島畑山に強固

な防御陣地を構築して、豊後侵攻に資することにあつた。このためには現地住民の人夫役などの動員が不可欠であつた。次の資料がそのことを物語っている。

△丸市尾浦▽

旧五月十八日（陽曆六月二十九日）より十九日まで、人夫を賊に出すこと凡そ百八十人余、悉皆無賃、但し台場築立等に使役せらる。

旧五月十五日（六月二十六日）より丸市尾浦字地下に賊より炊出場及び分営等を設け、同十九日（中略）三河内村に引払う。

△葛原浦▽

旧五月十九日（六月二十九日）より二十一日まで三日間、人夫を賊に出すこと凡そ二百人、その役用は台場建築及び荷物運送に係り、遠きは五、六里、近きは二、三里に達す。皆脅迫手段に出ず。悉皆無賃。

両浦の人夫役動員の期間を見ると、丸市尾浦の十八〜十九日に葛原浦の十九〜二十一日が続ぎ、西郷軍が拠点の構築を急いだことが分かる。台場の位置は記されていないが、後に激戦が展開される石神峠や津島畑山を始め周辺の峠がその対象となつたのであろう。

国境線に拠点を築いた西郷軍に対しては、二十八日、二十九日と海軍艦船が艦砲射撃を加えて反撃した。このためか、その後侵攻した西郷軍の態度は一変し、指導的な立場にある人物を捕縛し、食料・軍資金などの供出を強要あるいは強奪するなど村民を恐怖のどん底に陥れた。

・旧五月二十三日（七月三日）午後一時頃、（中略）三河内村より賊軍の内宮崎十六番小隊長坂本某、分隊長一万田忠右衛門なる者、賊軍七、八十名を率い当葛原浦へ乱入、伍長甲斐茂太郎を捕へんとす。同人危急を脱して蒲江浦に逃る。而して賊同人所持の金三百八十円余、器具衣服等を奪う。其他略奪脅迫せらるる者多し。

・同日午後四時頃賊徒来りて（中略）茂太郎長男栄太郎（当時十三年）を捕え去る。其後賊軍日向国臼杵郡三河内村の守を捨てて去るに及び放ち遣る。

・同日同時、賊徒葛原浦總代甲斐五三郎を捕え、百方脅迫、促すに夥多の金穀を以てす。同浦人民同人が賊軍の為に生命を謬られんことを恐れ、毎戸（戸数七十）より白米一斗金一円ずつを出す。而して五三郎許さる。

直川村域の村々

〔西南役戦地事蹟報告書〕・『蒲江町誌』・昭和五十二年より）

直川の村々に西郷軍が姿を現したのは五月下旬から六月初旬にわたる頃であった。五月二十五日、薩摩軍三〇〇が重岡から横川を経由して佐伯に侵攻し艦砲射撃により撃退された。以後六月初頭の二次侵攻も同じ経過をたどったものと推定される。

丁度その頃、六月一日から十日にかけて臼杵攻防戦が展開された。臼杵を占拠した西郷軍は官軍の反撃で鏡峠、床木・大坂本・上小倉（以上弥生町）を経て横川へと後退、この時、六月六日の第三次佐伯侵攻を果たした西郷軍も佐伯土族を伴い同時に撤退、横川で新奇隊を結成せしめ、十二日、共に重岡へと退却した。このころは直川地域は重岡と各地前線を結ぶ西郷軍の通過点にあたり、また六月中旬以降から始まる官軍の反撃と、同二十四日から始まった西郷軍の反撃、さらには七月中旬にわたる山岳地帯での一進一退の戦いで、直川の民衆もさまざまな負担を強いられたものと考えられる。

原資料がないため、詳細は不詳であるが、昭和四十六年に直川村教育委員会がまとめた「西南の役と直川村」によって当時を偲ぶことにしたい。内容は伝聞による。

「薩摩軍先遣隊約三〇〇名が横川村月形に駐屯」、その際駐屯隊長が神官小野登代彦を尋ね同氏に刀三振を贈り、村人に対して西郷軍決起の理由を伝えたという。村人に対して強いた負担については次の一文がある。

部隊は旧大庄屋武田氏邸宅に宿宮裏庭に炊事場を造り食料の徴発に当たる一方、（中略）横川・仁田原より網の「ユラ」を集め、終日弾の製作に従事した。（中略）女房たちは炊事に雇われ、老人達はワラジ作りに又偵察に出るであろう道案

内などさせられ、いずれも賃金をもらい兵隊たちにも馴れ、平常通り田畑の仕事をしていた。

服装は小手脛当、袴、白鉢巻、白木綿の腹当てに帯刀、又は背負ったり区々まちなちで鉄砲を持ち、中には長髪の者も見受け、だんぶくろ（軍服）は少なかつたと伝えられた。

西郷軍の服装が様々であるのは出兵時から見られたことであるが、隊員の中に竹田報国隊や中津隊員がいたらしいことも背景にある。西郷軍の態度が穏やかであったのは、時期が佐伯侵攻の繰り返された五月末から六月初旬のことと推定され、臼杵攻防戦に敗退する前で西郷軍にも余裕があつたものと考えられる。

国境山岳地帯で一進一退の攻防が展開される六月中下旬から八月にかけては、村々に侵攻してくる西郷軍の態度も一変する。先の伝聞を続けよう。

小野市から横川への補給路は官軍に遮断され、北川村よりの補給は陸地道一本に制約された。補給路の延長と基地における食料の不足に、最短距離の下直見、上直見、赤木の各村を選び（中略）、人夫三百余人を強制、徴発、食料の輸送に当たらせた。（中略）二百余の薩軍は神内部落の各戸に分宿、（婦女子は仁田原大鶴に避難）下上直見、赤木より食料の徴発輸送に当たたる一方、（中略）陣地を掘らせ、夜はこの抵抗線に拠つた。

この時期は、七月初旬の西郷軍の反抗以後十一日ころまでの戦線膠着期間のことではないかと推定される。

西郷軍侵攻拠点重岡の人々

宇日町域は、五月十二日の奇兵隊進攻以来官軍が奪回する七月初めまで、ほぼ二カ月間にわたって西郷軍の軍令下に置かれた。西郷軍の侵攻を受けた豊後の町村の内、最も長期にわたって様々な負担を強いられたのが重岡であった。高野和人著『西南戦争豊後地方戦記』（青潮社）により、当時の村人の置かれた状況を探ってみよう。

爾來重岡ノ人民ハ毎日軍用品ノ運輸又ハ負傷者、病者ノ後送等ニテ使役セラル。（中略）人馬繼立所ヲ設ケラル（薩軍ノ命令ナリ）。各部落ヨリ世話人出頭毎日繼立所ニ詰切ル。（中略）何程人夫ヲ使役シテモ賃銭ヲ支給セズ。単ニ帳面ニ其日

ノ人夫ノ出方等ヲ記載シ置クノミ、賃錢ヲ請求スレバ迫テ大支払ヲ為スト答フル丈ナリ。

これを見ると村民の負担は、台場造営などの人夫役に止まらず、人馬継立役などの補給線の維持確保、さらには負傷者の後送など、事実上西郷軍の軍事行動の一端を担うことを強いられたことが分かる。これは、重岡が大野郡・海部郡と日向北川、ことに奇兵隊の根拠地延岡とを結ぶ交通の要衝に当たっていたことがその背景にあった。なお「賃錢ヲ支給セズ」とは、他の人夫役でも同様であったし、また「幾夜止宿シテモ一錢ノ宿料食費ヲモ支給セズ、止宿セシ家ニ飼ヘル鶏ハ勝手ニ捕ヘテ之ヲ食ヒ、薩兵退去後ハ一声ノ鶏（声）ヲ聞クヲ得ザリシ」（前掲書）という実態であった。

継立業務は非常な重労働であったが、西郷軍の強要で村民も命惜しさにしぶしぶこれに従事するというのが実情であった。これには重岡以外の人々も動員されていた。文中の熊田は現北川町の中心（役場付近の字名）にあたる。

（人夫は）最初ノ内ハ世話人ノ申付モ守リシモ、後ニハ中々服従セズ種々ノ苦情百出セリ、（中略）今尚記憶ニ存セリ、或る日、小野市村ノ人夫十人程負傷者ヲ運ビ来リ、継立所ニ卸シテ「ヤレ〜」ト肩ヲ撫デテ婦ラントスルニ、当所ニハ人夫一人モ居残ル者無ク継立ハ不可能ナリ、薩兵ハ（中略）更ニ熊田マデ（五里半）行ケト命ズ、人夫承知セズ色々ト抗弁セリ、薩兵大喝一声腰ナル芙蓉ヲ引抜キ、命ニ背カバ之アルノミト鼻先ニ差出セリ、此見幕ニハ最早一片ノ言語モ出デズ、唯々トシテ担キ立チテ熊田ニ赴キタリ。（前掲書）

岡藩郷筒と農兵徴集

六月十日までの臼杵攻防戦に敗退した西郷軍は、武器弾薬の不足も深刻になり、侵攻村落から猟銃などの銃器や製造材料となる鉛や銅などの徴集にやっきとなった。竹田でも見られたことであるが、重岡では、岡藩時代の施策も手伝って次のような挙にでたという。

薩摩軍ノ火薬ト弾薬ニハ大ニ困窮セルナリ、宇目郷ニハ獵者多ク郷筒ト称シ三百挺アリタリ、中川氏文禄二年竹田藩ニ入リ込ミノ時ヨリノ制度ニテ（中略）一朝有事ノ曉ニハ竹田ヨリ出兵ハ手間取ルヲ以テ、屯田兵的ニ三百挺ノ郷筒ヲ備ヘア

リシナリ、獵者ノ家ニハ必ず火薬ト鉛アリ、之ヲ探知シテ尽トク納付セシメタリ、又獵者ノ打網ニハ「ユラ」アリ、之ヲ切落シテ納メシメタリ、延岡ノ方ヘ送り弾丸ヲ作ラシメシト云フ、寺ノ大鐘モ取り除ケテ弾丸ヲ作ルト云フ説モアリタレドモ之ハ事止ニナリタリ、但日向ノ方ハ総テ弾丸ニ作りタル由、証拠ニ薩軍ノ発射セル弾丸ニ銅製ノモノアリタリ。

(前掲書)

武器弾薬に限らず、西郷軍は兵員の損耗も激しく、日向方面では獵師からなる「農兵」を組織したことは既述のとおりであるが、重岡での様子は「和銃ヲ携ヘ刀ヲ帯ビ衣服ハ和服ヲ筒袖ニ変ジタルモノニテ、草鞋、股引、脚絆ノ出立ナリ」(前掲書)と伝えられている。重岡でも農兵の組織化が試みられた。中心になって動いたのが竹田で報国隊を組織した竹田藩士堀田政一で、旧知の旧代官深田太郎と接触して村民に強要した。この間の経緯について「前掲書」は次のように記している。

各部落ノ重ナル人ヲ酒利深田宅ニ招集シ論達シタリ、出席ノ面々ハ(中略)確答モ出来ストノ理由ニテ其場ヲ切抜ケントセリ、(中略)河尻ノ代表者矢野祥平氏ハ剛直ノ人ニテ(中略)頭カラ不承知ヲ唱ヘ懇々縷々農家目下ノ事況ヲ説キ立テタリ、堀田ハ事理ノ如何ハ之ヲ顧ミズ、一声大喝不都合者ト呼び、従卒ニ命ジテ三寸繩ニテ縛リ上ゲテ庭上ノ椿ニ繫ギタリ、会衆ハ目と目と相語り唯タトシテ退散セリ、

時に六月十九日と推定されるが、この時期、敗退する西郷軍を追撃する官軍が小野市を攻略、さらに三国、旗返を落とし重岡に迫りつつあった。このような戦況が村々にも伝わってきたのであるう、帰途一五の部落代表は渡辺竹人宅に集まり会合、「直ニ命ニ服スルハ難事ナリ、況ヤ軍ノ近況モ如何ニ変ズルヤハ謀リ難シ」として「獵者ヲ集メテ謀ル事ハ一日猶予シテ、明後日トシテハ如何トノ議ニ決定シテ散会」した。「明後日」にあたる六月二十一日の早暁、官軍の反撃に西郷軍は重岡を撤退して熊田に向かい、農兵の組織化は失敗に終わったのであった。

第三節 官軍と民衆

一 宇目地域の村々と特需景気

官軍の進出と重岡の変貌

重岡は、五月十二日から六月二十日ころまで西郷軍の支配下に置かれ、以後は官軍の反撃によってその管理下に置かれた。その後一時西郷軍の反撃で陸地峠や赤松峠・黒土峠などの要衝が奪回されたこともあったが、重岡を侵すだけの余力は西郷軍にはなかった。

六月二十日官軍の本営が重岡に移され、七月五日には熊本鎮台司令官谷干城少将が豊後口諸隊指揮のため重岡入りした。豊後西南戦争末期、重岡は官軍の一大軍事基地化し、風紀衛生本部・糧食課分配局・兵器物品倉庫・竹木集積所・兵器馬具修繕所・梟官用務所・用係詰所・伝令使詰所・人夫詰所など多くの施設が付設された。人口も急増し、多数の兵員と動員された軍夫（大野郡出身者なども含む）、軍需物資の供給業者、その他官軍目当てに一儲けを企む諸商人などで、一時寄留者は兵員も含め六〇〇〇人を突破したという。

兵舎・千人小屋・商店軒を連ねる

当時の状況については、『豊後の西南戦争』や『西南戦争懐古追録』に詳細に記されているが、それによれば、民家は全て軍の宿舎に当てられ、不足には小屋も作られた。人夫は大分郡・大野郡からも徴用され、「長さ一〇間入り八間（一〇間もある）の千人小屋が建てられ同様の家は全て千人小屋と呼んだ」（釘宮郷著『豊後の西南戦争』平成一〇年）という。周辺の山岳部で激戦が続く戦争の先行きが見えないこともあって、重岡周辺はさながら小さな町と化した観があった。伝聞によってその実態を紹介しよう。

重岡、仲江は全て兵舎となり、鹿乗の御領井手付近や長昌寺下から年の神の下まで酒屋、菓子屋、餅屋・甘酒屋・うどん屋・呉服屋・写真屋、風呂屋、雜貨屋、飲食店など七〇軒余りが立ち並び、昼も夜も大いに賑わった。

鹿柴ろくさい構築と炊き出し手伝い

(渡邊用馬著『西南戦争懐古追録』Ⅱ『宇目町誌』より)

戦争は、村民の農業を主とした平穩な日常生活を彼方に押しやり、西郷軍滞在中は「農業ヲ働ク暇ハ皆無」の有り様で「婦女、老人表ヲ収納シ、田植ノ準備モ少シハ着手セル位」、官軍が進出して後、田植えを終えたが「其後草手入等モ不十分ナレバ、畑作ノ如キハ大ニ兩年モ加勢シテ不作」(『西南戦争豊後地方戦記』)という状況であった。

村民に課せられた労務の内から、鹿柴構築と糧食炊き出しの実態を紹介しておこう。

(糧食課は) 宮園宇一郎宅を本部とし課員五〇数人が詰め切り指揮監督し、安藤亀太郎宅との中間になる畑一面に掛け小屋を作り、陣鍋(二斗炊き)三〇数個を据え付け一日六俵を炊いた。炊いた飯は重岡周辺より徴発した婦女一〇〇人余が四組に分かれ、にぎり飯を作り、直径三尺位の丸籠に入れて軍夫詰所に運び、軍夫がこれを赤松峠(中略)方面の戦場に一日二回運んだ。(『西南戦争回顧追録』)

他方「鹿柴」とは敵の襲撃、ことに西郷軍得意の抜刀隊の切り込みを防ぐために台場の周りに巡らした竹・木材で組んだ防護柵を指す。官軍本営はこれを陸地峠から木浦にわたる重要な拠点に築造したが、それを担ったのが周辺村落の老夫であった。

構築の様子は次のようであった。

竹木は重岡・小野市から徴発し、荒縄は大野郡・大分郡などから徴発して重岡の矢野頼蔵宅西側の田に(中略)集積された。(中略)昼間に杭と竹の寸法を整理し、日暮れになると守備をしている胸壁の近くに軍夫が運び、日没後夜陰に乗じて火を用いず前線各所に手分けして一斉に着手し、四、五日で完了した。また鹿柴の前一〇間にわたり樹木を残らず伐採して見通しをよくした。(前掲書)

相当の重労働であったと推定される。

戦争景気とその功罪

既述のように西南戦争は、現地民衆の側から見れば、民衆の生命・財産・生業を危機に晒すばかりか、時にはそれらを奪い破壊して民衆を不幸のどん底に陥れる悪しき所業であった。

他方西南戦争は、官軍と西郷軍の物量の差が勝負を決めた戦争でもあった。官軍は、艦船・車両・武器弾薬は言わずもがな、兵員の諸装備・衣料・食料その他軍需物資の供給において、西郷軍を遥かに凌駕していた。西郷軍が侵攻地で無貨で現地住民を酷使し、また武器弾薬・食糧あるいは軍資金を各地で強奪したのは、物量の確保なくしては戦えない長期戦を全く予想していなかったことの証しでもあろう。

豊富な物量と軍資金に恵まれた官軍は、現地住民から貸借した施設・建造物、徴発した物品・労力などに対価を支払い、親政発足後間もない自給自足的な農村経済に、一時的ではあるが大きな影響を与えた。当時の重岡の状況を伝える次の資料がある。

官軍滞在中ハ金儲ケ多ク枝竹ヲ束ネたいま松明トナセルモノ、麻幹あまから松明ニテモ一本五錢位ニテ買上ラレ、松製ノ物ハ三十錢ニテ買上ケラル、其外薬繩等モ相当ノ買上ケアリ、又日雇賃ハ通常六、七十錢（賄付ニテ）、其他商人ノ小屋作り等ヲ請合ハ一日二、三円ノ報酬ヲ得ルハ容易ナリシ、農作ノ不足ハ之ヲ以テ補フテ余リアリタル位ナリシ。

（高野和人『西南戦争豊後地方戦記』青潮社）

この資料を見ると、規模は別にして官軍の駐留した県南の僻村が、戦争に伴う一種の特需景気に沸いていたことが読み取れる。このような恩恵に恵まれた地域では、文面のように戦争のもたらした被害を償って余りある収益を得ることができた。

戦争が西郷軍の敗色濃厚な時期に立ち至り、豊日国境で最後の激戦が展開される状況下では、この「景気」も一瞬のうたかたと消え去るのは誰にも予測できたことであつたらうが、現実はずっと厳しいものであった。戦争が終わると全国的な不況が

米価の暴落を伴って農村を襲う。前掲書は次のようにその現状を伝えている。

戦後ハ通過膨張シ賃銭高クナリ、戦前は三斗入米俵六、七十銭ノモノ、戦後ハ壺円三十銭トナリ農家ノ懐ハ肥エタリ、又十一年三、四月ノ頃ニ重岡外各部落官兵宿舍料トシ、毎戸数十円ノ金ヲ下賜サレケレバ自然ト奢侈ノ風モ起リ、飲食店ノ如キハ毎夜太鼓三弦ノ音ヲ聞ケリ、故ニ得タル収入ハ忽雲烟ト化シ去リ、却ツテ負債ハ入代リニ生ジタリ、其後ハ経済界不況トナリ、一般人民ハ苦境ニ立テリ。

(前掲書)

二 海上封鎖と県南沿岸地域の食糧難

県下における戦闘が、豊日国境地域に凝縮されつつあった七月〜八月のころ、日向では西郷隆盛を擁する西郷軍本隊が官軍の猛追を受け、七月二十四日には都城、七月三十一日には宮崎、八月十四日には最後の拠点延岡も官軍の手中に落ちた。このような戦況の変化に伴い、官軍は県南から日南海岸一帯にかけての海上での警戒を強化し、徹底した海上封鎖作戦を展開した。

リアス式海岸が続き、全体として農地に乏しく漁業を主産業とする県南地域は、食糧を他地域から購入して生計を営む集落が殆どであった。中でも戦闘地域になった鶴見半島以南の米水津・蒲江一带はその典型であった。海上封鎖によって現地住民が食糧難に陥ったことを示す次のような報告書がある。

大嶋(鶴見半島東)以南之海面廻差留置候処、元来同地方之義ハ米穀等総テ他所ニ仰ギ偏ニ商船之糶売ニ取り来リ候得共、前述ノ通船被差留候ニ付、近来殆ド飢餓ニ迫リ、目下難捨置旨当地出張警部ヨリ申出、情実無余技相聞且同地方戦闘線一モ追々相進ミ、既ニ丸市尾ニ警視隊ノ本営ヲ移セリ候ニ付(下略)。

(『明治十年騒擾一件』青潮社)

この段階では屋形嶋以北が取り上げられているが、以南については「依然嚴禁致置候積ニ有之候」とされ、解禁は豊後戦の

終わった九月中旬過ぎであった。

おわりに

以上西南戦争を、鹿児島・熊本・宮崎諸県と対比しながら、一般民衆とのかかわりに焦点を合わせてまとめてみたが、各市町村にはまだまだ「市町村史・誌」編纂過程に収集された史料が多々保存されていることと推定される。今後の課題は、このような史料を活用できる体制を早急に整え、研究を一層推し進めることであろう。これは単に西南戦争に限ることではなく、大分県史全般にも言えることである。

現在県公文書館などで資・史料の保存が叫ばれているが、活用することが最善の保存策である。活用の主体的な役割を担う組織は当然のことながら『大分県地方史研究会』であろう。『大分県史』や『市町村史・誌』の編纂事業も一段落し、同様に郷土史の研究も一段落したかに受け止められる昨今であるが、市町村に眠る史・資料を組織的に紐解くことにより、地方史研究にも新たな展望が開けるのではないかとも考えられる。新進気鋭の若い研究者のためにも是非活動舞台を提供してほしいものである。